The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	石塚, 裕子
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 269-272
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68217
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

石塚 裕子
大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

未来共生イノベーター博士課程プログラム（以下、未来共生プログラムと略称）は、プログラムを通じて大学院生が身につけるべきことは、知識と能力だけでなく、ものごとに対する態度や、現実に働きかける行動力を含み、従来の大学において教育研究の対象となってきた既成の学問の枠組みからは、はみでるものであることをめざしてきた（栗本 2014）。

この“はみでるもの”を学ぶ場として、未来共生プログラムではプラクティカルワークという授業を行っている。プラクティカルワークでは、東北被災地のコミュニティ・ラーニング（1年次夏季）、関西地域での公共サービス・ラーニング（1年次後期）とそれを基にしたプロジェクト・ラーニング（2年次前期）、海外インターンシップ（3年次後期）、キャリアを想定したフィールド・ラーニング（4年次）を実施している。

プラクティカルワークという挑戦的な授業を通じて、履修生と担当する教員は何を学び、そこから何を伝え、今後どのように行動を起こしていけばよいのか整理する必要性を感じていた。そこで、プラクティカルワークでお世話になっている現場の共生の諸課題に取り組む努力を、知恵を、たくましさを広く伝えることへの試みとして、昨年度の『未来共生学』第4号において、「未来共生プラクティカルワークの現場から」と題して初めて特集を組んだ。

この特集に対して様々な反響をいただく中で、未来共生プログラムを受け入れていただいている現場の方の声を聴きたいというものがあった。

教育研究の成果の提供による社会貢献が大学の第三の使命と位置付けられる中で、各大学は地域との連携の在り方を模索し、PBL（Project Based Learning）

やサービスラーニング等、教育活動における地域との連携を活発に行うようになって久しい。プラクティカルワークでは、学生の身近にある、足元の多様な共生の課題と出会う機会となり、現場の方々と協働で実際に実践できる機会を得ることができる。このため、学生にとっては多くの学びがあることは間違いない。一方で、受け入れていただける現場にとって、どのような利点があるのかについては、あまり語られてこなかった。

そこで今回の特集では、それぞれの現場で学ぶべき共生の諸課題と、その活動、知恵を考察するとともに、現場に立つ方々、学生を受け入れてくださった方からも一筆をいただいた。

大阪市立市岡中学校の山田美佐子氏は、履修生の林貴哉が公共サービス・ラーニングとして訪問した機会を日本語・適応指導教室あり方を確認する機会と捉えたという。同じく大阪市立市岡中学校の松田和典氏は、学生が来ることによって日本語教室担当者の負担が軽減されるという実利の面よりも、教室の生徒が担当者以外の人間と長期間に渡って接する意味を感じ、生徒も担当者にとっても様々な刺激を受けたと評してくださった。

小さなくりの木会の西野玲子氏からは、活動の存続に危機感を感じはじめていた中で、眞浦有希らが企画したプロジェクトにより「私たちの活動や想い」をまとめた500回記念誌が発行できたことの喜びを伝えていただいた。また、アデオジャパンの森本真輔氏からは、小川未空の海外インターンシップの活動がアデオのフィールドスタッフにとっても大きな刺激となったと評していただくとともに、フィールドとの関係を継続することの大切さを示唆いただいた。

そして、たくさんの学生を何度も受け入れていただいている大阪市港区役所の花立都世司氏からは、受け入れ側の試行錯誤について詳述していただき、学生との取り組みを単独の事業にとどめず、施策として発展させている様子をご報告いただいた。そして、未来共生プログラムとの協働は、学生発ということで、新たな課題へ取り組むきっかけになったこと、大学との協働ということで区民への発信のしやすさ、新たな人材発掘の場になったなど、具体的な効果について提示いただいた。

花立氏が指摘しているとおり、プラクティカルワークは研究ではなく授業として、フィールドワーク、協働実践を行うため、長くても約6ヶ月という限られた期間で現場と関わることになる。学生にとっては、6ヶ月という期間は長く感じるかもしれないが、現場にとっては、たった6ヶ月なのである。それは、現場に赴いた履修生達も感じることもあり、その葛藤を乗り越えて実施したプロジェクトも少なくない。

その一方で、未来共生プログラムも6年が経過し、履修生は変わるが同じ現場に再びお世話になる機会も増えてきた。また、NPO法人こえとことばとこころの部屋ココルーム（以下、ココルームと示す。）に通い続けた松本渚や、しょうないガダバの管理人をしている井坂智人氏のように、授業の枠組みを“はみでて”活動する履修生もいる。そして、松本渚がココルームの上田假奈代氏に手紙のやり取りをお願いし、そこから“一緒にあたらしいことばを見つけることは、だれかと共に生きるときのひとつのあり方”と学んだように、前回も今回も本特集を執筆するにあたり現場を再訪し、活動に参加し、対話をし“はみでた”活動を履修生も教員も行なった。

このように、同じ現場に履修生も教員も様々な形でお世話になる中で、未来共生プログラムと、大阪大学と現場の関係が継続され、歩は遅いかもしれないが確かな信頼関係を構築しつつある。この信頼関係を土台に、これからもプラクティカルワークを履修する者達は、新たな学びを得ることができると考えている。

本特集を通じて、“はみでるもの”を学ぶ場である未来共生プログラムのプラクティカルワークの現場から生まれた本特集が、共生を実現するための手立てを考える「共生のアート」（志水 2014）を一人でも多くの方が考える、学ぶ一助になることを願ってやまない。

最後になりましたが、本特集の執筆にあたりご協力、ご支援いただいた各種団体の担当者の方をはじめすべての関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。

また、ご多忙中にも関わらずご寄稿いただいた、大阪市立市岡中学校・帰国した子どもの教育センター校・日本語・適応指導教室担当の松田和典氏、山田美佐子氏、豊中市桜塚校区福祉会小さなくりの木会の西野玲子氏、大阪市港区役所の花立都世司氏、アデオジャパンの森本真輔氏ならびにNPO法人こえ

とことばとこころの部屋ココルームの上田假奈代氏に重ねてお礼申し上げます。そして、イスラエルで活動中の未来共生プログラム一期生の井坂智人氏にも感謝します。

参照文献

榎井縁・石塚裕子
2017 「未来共生プラクティカルワークの現場から」『未来共生学』4: 245-250、大阪大学未来戦略機構第五部門。

大阪大学工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻・米谷淳編著
2016 『うまくやれる工学のアクティブラーニングOJE』大阪大学出版会。

川人よし恵・石塚裕子・加賀有津子
2017 「まちづくりの主体としての大学と自治体の連携のあり方に関する検討」『都市計画論文集』52 (3): 660-667。

栗本英世
2014 「『未来共生学』創刊にあたって」『未来共生学』1: 3-5、大阪大学未来戦略機構第五部門。

志水宏吉
2014 「未来共生学の構築に向けて」『未来共生学』1: 27-50、大阪大学未来戦略機構第五部門。